

熊慶笏の著作について

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

熊慶笏は、中国清代の医家で、字は叔陵、江西安義県の人である。最初仕官したが、後に医学に転じ、名を高めた。難産の妊婦に鍼をして母子を救ったなどの記録が残されている。著書に『扁鵲脈書難経』六卷(1817年)、『中風論』(1821年)がある。

『扁鵲脈書難経』の初刊本である嘉慶23年(1818年)序刊(見返しでは嘉慶22年〔1817年〕)高桐熊抱經堂刻本は、1998年に北京出版社から刊行された『四庫未収書集刊』第四輯第二十四冊に影印されているので、現在では簡単に見ることができる。本書では汪廷珍、朱錫穀、馮履晋の三序に続いて、「環谷公学医訓」と題する一編の医論が置かれていて、歴代の医書や医家に対する批判が述べられている。例えば「若楊上善，全元起，王太僕，滑伯仁，吳鶴臯，馬元台，張景岳之流，不過隨文訓詁斷章取義而已。『難経』伝自呂広，最稱完善。惜附偽訣同行。幾使古經湮昧。馬元台，李蘋湖輩從而詆之，殆亦下士聞道大笑者歟。『傷寒』『金匱』本属一書。王叔和誤截於前，成無己附會於後，由是分門別戸，入主出奴者衆矣。是古人之書靡不伝於後，而後人之学，多不逮於古者，不以經注經，轉以疑伝，疑則畏難而不溯源流之失也。」と述べて、『素問』や『傷寒論』の注解者たちに対して批判的な見解を展開している。また「堪備内景之校讐所可怪者王叔和，生当西晋。上可接餘緒於南陽。身為大医近可闡藏書於秘府。乃觀所撰『脈経』，証以『靈』『素』『難経』大相矛盾，所次『傷寒』，証以仲景序例尤多抵牾。此実医学所由岐也。識不足以疑之必有競為異說者矣。」として、西晋以降の医学は、王叔和の弊書を受け継いでいると述べている。

本文では先ず『史記』扁鵲伝と、『戦国策』に見える扁鵲関係の文章を引き、注解を加えている。次に『難経』の各難に対して、詳細に注解している。各難の末尾には、経文内容の総括が附されている。更に時に内容に関連した題目を設け、『素問』『靈枢』『脈経』『傷寒論』ならびに歴代の医書を引いて詳論している。たとえば三難の末尾では「関格攷」と題して、『素問』『靈枢』『傷寒論』を引用し、「王叔和不求実理，輒摭捨人迎氣口之名，強分左右，豈一人之身，左有陽而無陰，右有陰而無陽歟。何其誕也。」と王叔和批判を展開している。

二十一難の末には、一難から二十一難までの脈診を総括した「総論」を置き、「寸口脈法図説」「経脈部位法」「臟氣部位法」「弁脈体法」，「面部察色図」と題して著者独自の見解を述べている。同じく三十難の末には、二十二難から三十難までの経絡を総括し、十二経脈，奇経八脈の図解，十四経の経穴とその取穴法が述べられているが，図解の冒頭において，歴代の医学書には見られない「脾之大絡」の図が掲載されている。以下，三十難から四十七難では臟腑の総括に各臟腑図が，四十八難から六十一難では病能の総括に「五運六氣図」などが，六十二難から八十一難の鍼法についての総括では，末尾に「十二原表」と「九鍼図」が掲載されている。

本書は『難経』の註解書であると同時に，著者の医学理論を述べた医書であるが，初刊以降，近年まで一度も再版されず，広く流布しなかった。なお熊慶笏の医論は，光緒10年(1884年)醉經閣刻本『中風論』(後に『三三医書』に収載)からもうかがうことができる。

熊慶笏の著作は清代医家の医経や『傷寒論』研究のあり方を考究する上で重要な著作であると考えられる。